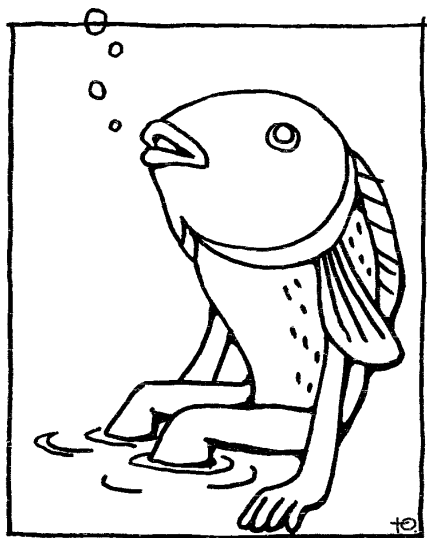


f i s h



文 村上きわみ
絵 ヲバラトモコ



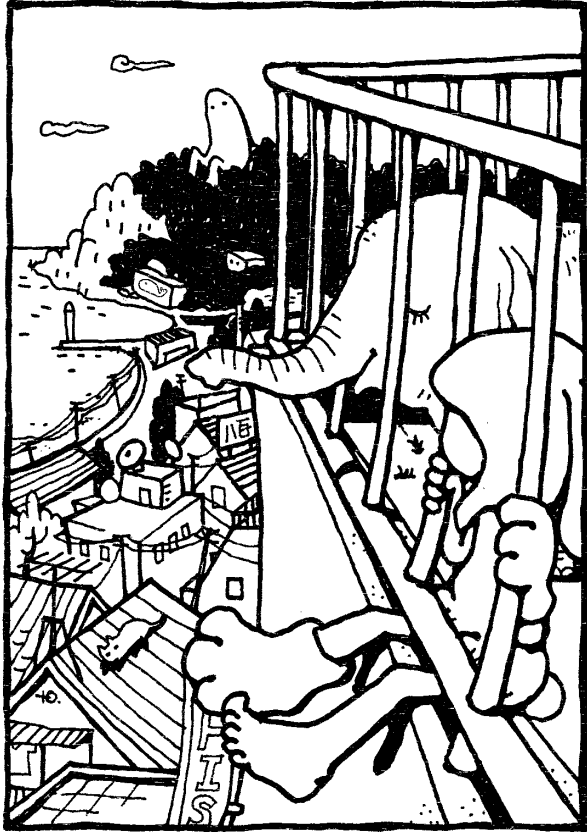
contents

夜の屋上は錆びたブランコの匂いがする。.....	3
世界はそう簡単には終わらない。とりあえず。.....	15
ひくひくひく空の下をただ歩くだけ。.....	31
○○○○ こちらアボカド一号。聞こえますか？ どうぞ。.....	43
雨の上に雨が折り重なっていくのを見ている。.....	57
ぼくらは一体どこまで行けるだろう、とあなたは言った。.....	71

裸足になって湿ったコンクリートの感触を確かめてみた。ひんやりする。冷気が足裏から全身にいきわたるまでのごく短い時間、ふと意識が一点にとまった。裸足のまま柵づたいに歩く。なんだか随分陳腐じゃないか。夜の屋上はいつも錆びたブランコの匂いがして、わたしは結局、また誰かのことを考えている。ねえ、今どこ？

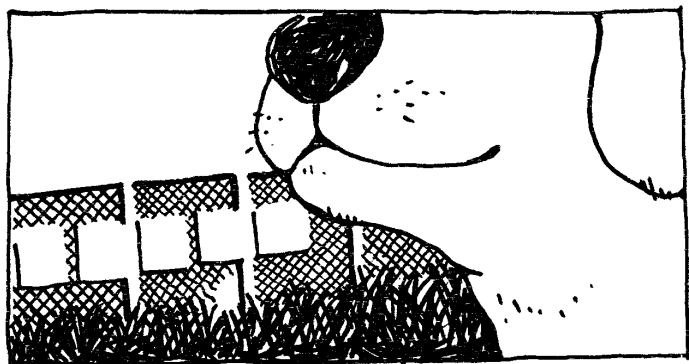
夜の屋上は錆びたブランコの匂いがする。





懐かしいような泣きたくなるような空だ
つないだ指をほどけば

パノラマの間違い探しの風景を
ふたり見ている非常階段



色白の仔猫を飼っているらしい

彼女も

彼女と別れた彼も

誰もいない市営プールに

置き去りにしてきた犬の名前はバジル

人数分のコーヒーカップからっぽのまま
扇動の畏は深夜に

絞り込むレンズの先で
曖昧に笑えば遠く傾いた空

恋人に手渡す 抒情
ココアならビター一滴落とした甘さ

ボクたちハ
疚しいココロヲ持テ余シ
ハズミデ首ヲ絞メタリモスル

